

このコーナーでは、MYANMAR JAPON代表の永杉が毎回、ミャンマーの第一線で活躍するリーダーと対談し、“現代ミャンマー”の実相に迫ります。

今回のテーマ 神と取り引きした医師、ミャンマー医療の実状



吉岡 秀人
特定非営利活動法人
ジャパンハート代表

YOSHIOKA HIDEOTO ☆1965年、大阪府生まれ。大分大学医学部卒業後、救急病院などで勤務後、95年から97年までミャンマーで活動。その後、岡山病院小児外科、川崎医科大学小児外科講師などを経て、2003年からミャンマーで医療活動を再開。04年に国際医療ボランティア団体「ジャパンハート」設立。ミャンマー・カンボジアなどで、多くの子どもたちの命を救ってきた。専門は小児外科。

医師界の異端児 国際医療活動に命燃やす

永杉 本日はお忙しい中、お時間を頂戴しましてありがとうございます。国際医療活動をはじめ、ミャンマー・カンボジアなどで1万人以上の子どもに手術を行ってきた、偉大なる医師です。まずは現在のミャンマー医療に従事された経緯についてお聞かせください。

吉岡 90年代にミャンマーで医療活動を行ってから、「医療の届かないところに医療を届ける」使命を感じました。同時に、現場には医師や看護師などより多くの医療者の必要性を痛感し、今日まで活動を続けてきました。実際の医療の他にも、保健活動や人材育成活動、災害やエイズなど疾患による孤児たちの施設運営など、多岐に渡ります。

学生時代は、勉強のできない子でした。よって「自分にできることは他人にもできる」と信じています。しかし、継続できる人といえどごくわずか。さまざまな人が途上国の医療支援を行っていますが、今までの約20年間、最前線で本当の国際医療活動を継続できている人は私以外にほぼ皆無です。海外医療をする医師はかつて日本で批判され、例外なく私も“異端児扱い”されていました。しかし、この20年間で何が起こったのか。3万人の集まる外科学会にて、世界的な権威の集まる場の研究発表者8人の1人に選ばれ、また日本各地の学会で講演するまでになりました。

孤児に希望の光を 地域医療システムを確立

永杉 地道な活動が浸透している証拠ですね。では、現在のミャンマー医療の現状は、先生の目から見てどのように感じられるかお聞かせください。

また休みに関係なく、日夜の医療活動を続けられている、と多くの方から聞きます。なぜ自分を追い込んでまで、活動を継続されているのでしょうか。

吉岡 現在、ミャンマーの手術患者は年間2,000人を数え、その大半が奇形児やヤケドを負った児童たちです。ここ

2004年、ミャンマー中部ザガイン地区のワッチェ村の一角にある病院で治療を始めました。子どもの医療費は無料です。現在では病院も拡大し、病棟はほぼ満床状態、年間約2,000件の手術を行い、1万人を超える患者たちを診療しています。

この仕組みのポイントは、患者ではなく医療従事者が手術費用や入院費用など、すべてを支払うこと。一度医療を受けると、仮に治療費は払っても入院費などが多額になります。そこで治療費から入院費、食費や交通費に至るまで、すべてをこちらで負担するのです。病院にたどり着ければ、医療を受けられる状態ができました。

なぜそこまでやるのかと聞かれれば、やってあげている、わけではなく“やりたいから”です。「野球選手は、なぜ野球を続けるのか」理由は一緒で、訪れる子どもたちのために医療できるのが私の喜びです。自らの存在意義を認識するために、子どもは私にチャンスを与えてくれています。

対面医療を大切に 先を見据え支援していく

永杉 先生の強い信念の原点、少しだけ理解できた気がします。恵まれた日

年間約2,000件の手術を行い、 救った子どもは1万人を超える——

での大きな問題は、資金がないと医療を受けられないこと。マンダレーの病院の話で、緊急手術後に病棟へ泊めても、金がないため夜中に抜け出して村へ帰らないといけな。まともな医療ができるはずはありません。そこで

本の環境を捨ててまで、自分を追い込み、そして自身の存在意義を確認する。先生には及びませんが、私も同じ認識です。今後の課題があれば教えてください。

吉岡 この国でやり残している、救え



ジャパンハートの
ヤンゴン事務所にて

ない病気が2つあります。1つは心臓病の子ども、もう1つは白血病に代表される小児がんです。白血病は日本の回復率7割ですが、この現場では血液ガンの治療ができていない。この2つの病気を子どもから救うのが、今の使命です。当然、次なる手も打っています。医療途上の国はミャンマーだけではありません。カンボジアに病院を作る計画を進めています。過去の残虐な歴史的背景から、医師が完全に不足。医療が完全に取り残され、治療を受けられない子の支援が急務です。

また2015年にはASEAN地域において、医師免許が自由になります。医師は東南アジア内でどこへでも医療を施せ、また金持ちはより高度な医療を受けられますが、金銭的な事情を持つ層は度外視です。早急な対応と、各アジアにおける医療者の数を増やすことが重要になります。「ジャパンハートの活動を見たい」と訪れる日本人の数も増えてきました。見学するだけでなく、実際に一緒に活動したいという医療従事者も増えています(表参照)。

国際医療は組織の時代へ 日本人の“心”を大切に

永杉 地道な活動が口コミで広がり、2乗3乗になっているんですね。では最後に、素晴らしい成果の主な要因は何でしょうか。また今後の展望をお聞かせください。

吉岡 今日まで続いたのは、集まる人の“質”につきます。日本人の心は欧米人にマネできません。本当に目指す医療は何なのか、お金だけでなく、自ら金を払って医療の現場に携わりたい人が増え、次なる展望が見えてきました。個人による医療ではなく、組織で今の医療のあり方を変化させる時代へ。大事なのは、皆が当たり前前に寄付をする“仕組み”と、医療現場の“人”づくりです。

根本にあるのは、苦境にある子どもたちを少しでも減らせれば、という思いと行動です。この先、10年後の保証なんて誰にも、どこにもありません。思ったらすぐ行動、進むベクトルの方向が大事です。いくつか山を乗り越えてきました。上を目指しても人は、もう十分

だと満足することなく、上に到達すれば、必ずもっと上を目指します。どこまでも満足しないのが人間です。常に自分に負荷をかけながら、後世に誇れるものを1つ1つやっていきます。

永杉 私は最近ようやく、人の質やベクトルの重要性を実感してきました。ありがとうございました。これからも国際医療活動のトップランナーとしてのご活躍を心から祈念しております。



吉岡秀人率いるNPO法人ジャパンハートは、2004年より医療を受けられないミャンマーの方々に医療を提供し、現在は年

間1万人以上の治療、2,000人の手術を行っています。医療以外ではヤンゴンにて養育施設 Dream Trainを運営し、HIV感染や人身売買の危険にさらされている貧しい子どもたちを預かり、十分な衣食住を提供し自立を支援しています。我々の活動は皆様のご寄付に支えられており、ご協力をお願いします。詳細は団体HPをご参照下さい。

<http://www.japanheart.org/>



永杉 豊

MYANMAR JAPON 代表

NAGASUGI YUTAKA☆ヤンゴン在住。学生時代に起業、米国永住権取得後米国、中国に移住し現地法人や事務所を設立。現在は国際ビジネスアドバイザーとして、法人設立から現地企業の紹介、販路開拓など幅広くミャンマービジネスの進出支援を務める。ヤンゴン和僑会(準備室)代表、一般社団法人日本ミャンマー友好協会副会長。

【お詫びと訂正】9/20発行10月号「TOP対談」内記述に誤りがございました。対談者氏名「小丸柱憲」氏となっておりますが、正しくは「小丸佳憲」氏です。ご本人ならびに関係者皆様には深くお詫び申し上げます。

ジャパンハートのボランティア医療者の推移

